

筑波・つくば・ツクバ産の 新たな発想

関口智嗣

(独)産業技術総合研究所グリッド研究センター長
つくばサイエンス・アカデミー 事業推進委員



2005年8月24日、いよいよTXつくばエクスプレスが開業する。「つくば」と「アキバ」の両端の街を最速45分で結ぶという。

筑波研究学園都市の建設は、1963年9月に閣議決定され「試験研究及び教育を行うのにふさわしい研究学園都市を建設するとともに、これを均衡のとれた田園都市として整備（筑波研究学園都市建設法）することとなった。さらに、EXPO 85 国際科学技術博覧会を経て国際科学技術都市「サイエンスシティつくば」は一体的な開発を目指し、1987年11月30日、「つくば市」が誕生した。この後、特に国立研究機関は民間企業との役割分担を意識することとなり、より基礎・基盤的研究にシフトしてきた。極端に言えば10年、20年先において華開く可能性のある研究を遂行していれば責任を果たすことができたこのように、「つくば」は大都市から適度な距離を保つことで一般社会とは異なる価値観・時定数に支配され、特異な発展を遂げた。

2001年4月の国立研究機関の独立行政法人化は、この生態系に強制的な変化をもたらした。「つくば」独自の価値観を一般社会のものと整合させる必要に迫られてきている。最後の言い訳であった東京との時間距離ももはや通用しない。

つくばサイエンス・アカデミーの主要な事業のひとつである「テクノロジー・ショーケース」はアイデアの産地直送というコンセプトで開始された。つくば域内に分散している研究機関から産地直送の新鮮なアイデアを生産者（＝研究者）が市場に持ち寄って消費者（＝起業家、パートナー）や生産者相互に直接やりとりができるというつくばらしい事業である。しかし、社会的情勢の変化や心理的・時間的距離が短縮された今、「つくば」は今後も「つくば」に留まり続けるべきであろうか。

テクノロジー・ショーケース実行委員会において「峠の釜めし論争」があった。すなわち、「峠の釜めしは峠に留まって売っているから希少価値があり、注目を集める」という戦略と、「峠の釜めしはデパート駅弁大会に行くことで知名度が上がり、結果的に峠を訪れるお客さんが増える」という戦略の比較である。「峠」を「つくば」、「釜めし」を「研究成果」と読み替えていただきたい。もし「つくば」が「素晴らしい研究成果をもっていれば人は自然と集まってくる」として今後の戦略を展開するならば、つ

くばは現状維持すら困難となるだろう。例え生産者・研究機関が変化していたとしても消費者はその事を知らない。「つくば」はつくばの人が考えるほど一般社会に認知されていない事実早く気付く必要がある。

かつては電気・無線・パソコンマニアの聖地、今はバーチャルキャラクター・オタクの聖地となったアキバに、つくばは何をもたらすのであろうか。アキバはつくばがグローバルに展開するための最初の試金石となる。つくば市も東京事務所を設置し、進出に積極的である。産業技術総合研究所も情報通信分野の研究グループが新たにアキバに集結する。アキバの都市再開発ではITと産学官連携がキーワードである。かつて行商電車では大きな荷物を背負ったおばさん達が茨城産の青果物を消費者に届けていた。これと同じように、TXつくばエクスプレスに乗ってつくば産の研究成果物を消費地に直接届けられるのではないか。

「つくば産」研究シーズのバーチャル・ショーウィンドーを秋葉原につくり、大容量の高速コンピューティングで研究室と直に結ぶ。バーチャルな世界に飽き足らず、実体に触れなくなったら、そのままTXに乗り、45分でつくばへ向かう。バーチャルも実体もア・トウ・アで直結するような双方向のつながりは、技術的なレベルではもう十分に実現可能である。個性も生い立ちも異なる二つの街が有機的なつながりを積極的にもつことによって、画期的な着想が孵化する予感もある。「筑波」から「つくば」へ、そしてアイデアを創る「つくば」とアイデアを商う「アキバ」のコラボレーションによる新たな「ツクバ産」の発想に期待したい。

せきぐち・さとし

1982年東京大学理学部情報科学科卒業、筑波大学大学院修士課程理工学研究科にて数値計算と並列計算機を学ぶ。1984年通商産業省工業技術院電子技術総合研究所に職を得、現在に至るまで筑波の変遷を目の当たりにしてきた。データ駆動計算機SIGMA-1、ネットワーク数値情報ライブラリ Ninf の開発等に従事。グリッド協議会会長、情報処理学会ハイパフォーマンスコンピューティング研究会主査、つくばサイエンス・アカデミー他多数の学協会委員を兼務。つくば市在住。